

台灣のデパートの「鬼」

—へ世間／の位相、へ話／の位相—

伊藤 平

はじめに

台湾の古都、台南市は人口七十五万。嘉南平野の南端に位置する港湾都市である。気候区分でいうと熱帯に属する。かねてより南部の中心都市であったが、近年になって、台湾第三のサイエンス・パークとして発展を遂げている。

最近、台南っ子の間で話題になつてゐるのは、二〇〇一年にオープンした某日系デパートをめぐる噂である。話によると、

現代建築技術の粋を集めたこのデパートに「鬼」が出るという。もちろん「鬼」といつても、日本の「鬼」ではない。中華圏の「鬼」である。歴史の古い台南には、寺廟や城址などの古跡が多く、それらにまつわる鬼の話も数知れないが、そのなかでも、デパートの鬼は特異な存在である。

噂の火元となつたのは、そのデパートの建てられた土地が、かつて刑務所であつたという事実である。話柄としては、ありふれたものであるといえよう。

ことの真偽はべつにして、刑場や病院の跡地や古戦場、あるいは、大きな事故や災害などで多数の死者が出た土地、もしくは、多くの死者の眠る墓地の跡地に建てられた家屋には、とかく怪談がつきまとう。日本語でいう「化け物屋敷」、中国語でいう「鬼屋」の噂である。⁽¹⁾ 遅れば古典籍にも類例は枚挙にいとまなく、目を海外に転じても、宗教・民族のべつを問わず類例を搜しある。世間話研究の現状にはそぐわないかもしれないが、素朴な話型を見いだすことができよう。

しかし、表面的には酷似しているそれらの世間話も、個々の〈話〉を作り立たせている〈世間〉に注目したとき、際やかな個性が立ち現れてくる。普遍的な〈話〉を、〈世間〉の特殊性から読もうという試みである。⁽²⁾

以上の立場にもとづき、本稿では、世間話の〈世間〉に注目することにより、二十一世紀初頭の「台南」という都市空間が生み出した怪異について考えてみたい。

一、台灣史・台南史と台南監獄

最初に、台湾の歴史の簡単な紹介と、台南という土地の特性、および台南監獄の沿革について述べる。

本来、台湾に住んでいたのは、マレー・ボリネシア語族に属する先住民族である。今日の名称でいう「原住民」、日本統治時代は「蕃族」「高砂族」と呼ばれた人々である。日本時代は九部族、現在は十二部族が台湾政府に公認されている。

大陸から漢民族が渡ってきたのは、十五世紀の末。はじめは対岸の福建省から閩南人が、それからやや遅れて客家人が渡来し、今日にいたる台湾の人種構成は整つた。

台湾の歴史は、移民と外来政権によって造られてきた。大航海時代をむかえ、西欧諸国による『地理上の発見』が相次いだころから、台湾の歴史も動きはじめる。

一六二九年にスペインが北部の淡水にサン・ドミンゴ城を、一六三〇年にオランダが台南にゼーランジャ城（安平古堡）を築き、植民地經營をはじめた。その後、オランダはスペインを擊退し（一六四二）、台湾を掌中に收める。

やがて大陸に清朝が興ると、明の遺臣、鄭成功が台湾に渡り、オランダを駆逐した。一六六一年のことである。鄭氏政権が拠点としたのは、やはり台南である。オランダの築城したプロビデンジヤ城を赤嵌樓と改め、ここで施政を行なつた。

鄭氏政権の命運も、鄭成功の死とともに潰える。一六八三年、

鄭氏政権を滅ぼした清朝は、台南に台湾府を設置する。以後、清朝による統治が続き、その間、台湾の政治経済の中心は、常に台南にあった。一八八五年、清朝は台湾省を設置、首府を台南から台中へ移したのが一八八七年で、ここにおいて台南は政治の中心から外れるが、それ以降も南部の中心都市は依然、台南であった。その後、台湾省の首府は台中から台北へ移され（一八九一年）、今日の台湾の姿ができる。

台湾における台北と台南の社会的位置は、よく東京と京都の関係にたとえられる。歴史的にも文化的にも、台南／京都のほうが由緒があるものの、現在では新興都市の台北／東京にその地位を譲っている点が共通している。古跡や町並みの古さを生かした観光都市として発展を遂げている点や、近郊に経済の中心を担った大都市、高雄／大阪を擁している点も京都に似ている。日本人が京都に抱くのと同じ郷愁を、台湾人は台南に対してもつており、台湾人向けの台南観光ガイドでもそうした面を強調しているものが多い。

日本と台湾の関わりは、一八七一年の牡丹社事件と、それに続く台湾出兵（一八七四年）に始まる。これが布石となり、一八九五年、日清戦争後に締結された下関条約によつて、台湾は日本に割譲される。以後、日本の統治が五十年間続く。

日本統治時代の行政単位名は、台南県（一八九五）・台南厅（一九〇一）・台南州（一九一〇）と変遷したが、台南は常に南部の主要都市としての地位をまもつた。

当時の日本が建てた建築物には、現存しているものが多く、往時が偲ばれる。台南州庁（現・台湾文学館）や台南地方法院（現・司法博物館）、林デパート（当時、台南一の規模だった）などのように、外装だけ残されている場合もあるが、駅や警察署、消防署、気象台、日本勧業銀行（現・土地銀行）などは、そのまま駅や警察署として当初の目的のまま使用されている。

そうした歴史的建造物のほかに、普通の日本時代の民家でも現存しているものが多く（いまでも人が住んでいる場合や、廃屋になつている場合、改装されてレストランになつている場合など、ケースはさまざま）、その数はばかりしない。

もつとも、日本家屋のある風景自体は、台南のみの特色ではない。台湾全土で見られる光景である。

台南に特徴的なのは、オランダ時代、鄭氏政権時代、清朝時代、日本時代と、歴代の治世者たちの建てた建造物が、折り重なるようないくつか存在している点である。四〇〇年間、常に台湾史の中核にあつた台南だけがもちえた風景である。新築の洒落た喫茶店のとなりに朱塗の清朝時代の廟があり、その脇に瓦葺きの日本家屋があるというのが、現代台南の都市空間である。

さて、一九四五年、太平洋戦争が終結すると、台湾は中華民国の領土になる。二・二八事件（国民党政府による虐殺事件）が起きたのは一九四七年。知識人階層を中心に、数万人規模の死者が出たという。それに続く恐怖政治（「白色テロ」と呼ばれる）によつて命を落とした人の数は、いまもって不明である。

一九四九年、内戦に勝利した中国共産党が中華人民共和国の建国を宣言すると、敗れた国民党は中華民国の国号を残したまま台湾に本拠を移し、今日にいたる。以後、この時期に国民党とともに台湾に移住した人々を「外省人」と呼び、もともと台湾に在住していた台湾人「本省人」と区別するようになる。

台湾の民主化が進められたのは、本省人の李登輝が総統に就任した一九八八年からである。一九九六年には初の国政選挙が実施され、二〇〇〇年の陳水扁政権（民進党）の誕生によつて、国民党が政権の座を降りたことにより、民主社会が実現する。

本稿で取り上げる某日系デパートは、二〇〇一年ごろから建築がはじまり、二〇〇二年に完成した。台湾現代史に照らすと、自由なものの言いが許されるようになつた反面、国民党の圧政の記憶も生きしく残るところである。

さて、冒頭に述べたように、このデパートのあつた土地は、かつて刑務所（兼、留置所）であった。『台南市志』によると、台南刑務所が設置されたのは一九〇〇年（明治三十三年）、日本が台湾を領有して五年後である⁽³⁾。そして日本が去り、国民党が支配階層になつたのちも、依然、建物は刑務所として使用されていた。移転のため、刑務所が取り壊されたのは一九八六年、実に八十年あまりも、台南の市街地にあつたわけである。

試みに、一九三六年（昭和十一年）の台南市の地図を見ると、台南地方法院（博物館として現存）の脇に、かなりのスペースで「刑務所」が描かれている【図1】。次に、戦後の台南市の

地図を見てみると、やはり同じ位置に「臺南監獄」として描かれている【図2】。台南刑務所の外観のわかる資料は少ないが、当時の観光地図から、わずかながらに往時の様子がうかがえる【図3】。続けて二〇〇〇年の地図を見ると、デパートが建設される以前、ここが更地にされていたことがわかる【図4】。この状態が十五年間も続いたのである。⁽⁴⁾

人口七十万を越す都会の只中に、この規模の更地があるのは、事情を知らぬ者の目には不自然に映つたであろう。けれども、台南市民ならばよくわかつていたはずである、なぜこの土地に買い手がつかないのかを。紹介した地図には「刑務所」としか書かれていないが、じつは日本統治時代・国民党時代を通じて、ここは処刑場も兼ねていた。跡地に何が建てられようと鬼は出たであろう。

二、「鬼」の世間話

中国語の「鬼」とは「死者の靈魂」のことである。今日でも使われる「鬼籍」という語の用例がそれにあたる。いまの日本人がイメージする「鬼」とは著しく異なるが、かつては日本でも同様の意味で「鬼」という字が用いられていたことは、『今昔物語集』本朝世俗部の、平安京に跳梁する鬼の話を読むだけで了解される。⁽⁵⁾

日本の世間話に鬼が登場しなくなつて久しい。否、精確にいうと、「死者の靈魂」にまつわる世間話は「幽靈」という語に擱めとられ、「鬼」という語で表現されなくなつたのである。

しかし、中華圏ではいまだに鬼の世間話が多く囁かれている。台南の某デパートの世間話もそのひとつで、東アジア随一の売場面積を誇る豪華な店内と、熱帯に暗躍する鬼のイメージとが、奇妙なコントラストをつくっている。まさしく現代中華圏の鬼の世間話といつてよい。

以下、大学生のアンケート結果をもとに、論を進めていく。

調査対象は南台科技大学の学生、一二五人（男子＝三四人、女子＝一〇一人）。調査時期は二〇〇四年十二月である。

南台科技大学は、台南県水康市にある。学生の出身地は、台南県および高雄県と、それ以外の地域が半々である。台南県内に住んでいる学生は自宅から通つているが、県外出身の学生は、高雄出身者の一部を除いて大学の寮や周辺のマンションで暮らしている。ちなみに、アンケートに答えた学生では、台南県ならびに台南市出身者が三八人であった。

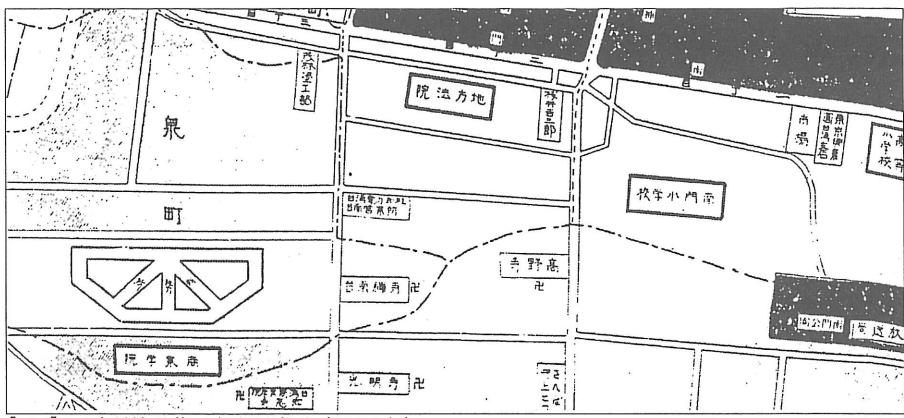
大学のある永康市は台南市に隣接している。永康市から台南市までは住宅密集地域が続き、両市の境目はないといってよい。寮生活をしている学生でも、生活圏としては台南市民と同じである。論の前提として、この点を確認しておく。

さて、アンケート項目は次のとおりである。

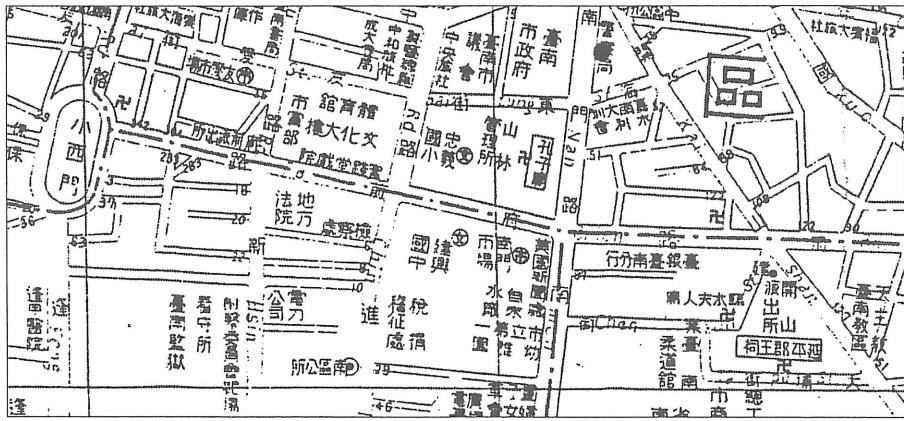
(1) ○○の「鬼」の噂について

(1)-(1) 知っていますか？ はい・いいえ

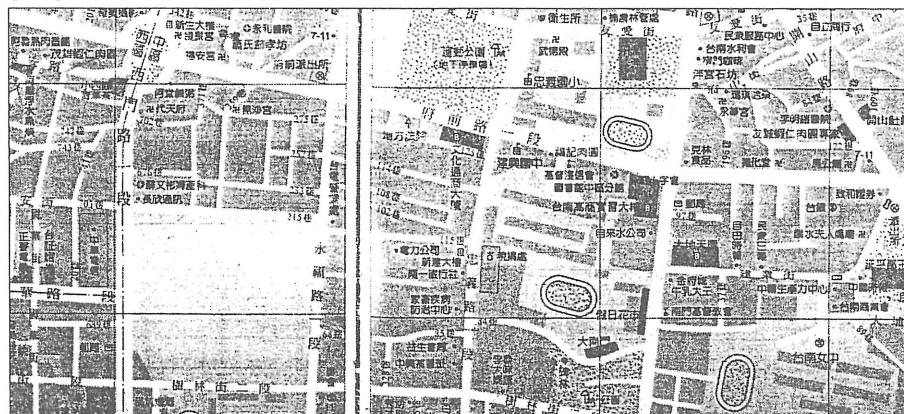
※以下「はい」と答えた方のみ記入してください



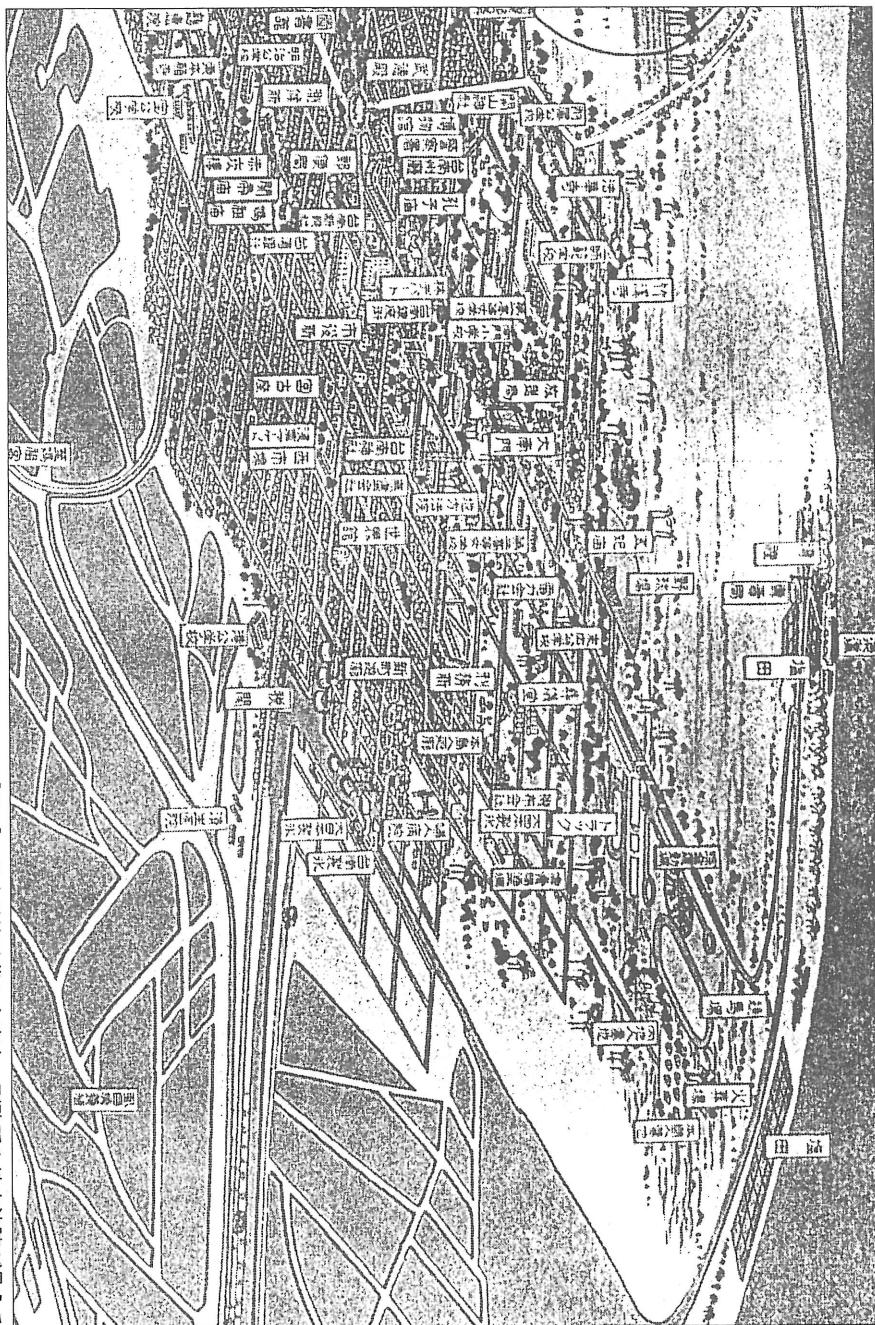
【図1】日本統治時代の台南刑務所（1934年）



【図2】 国民党時代の台南監獄（1983年）



【図4】監獄跡地（2000年）



【図3】日本統治時代の台南市 刑務所や地方法院が見える

(1) (2) いつ頃、知りましたか？

(1) (3) 誰から聞きましたか？

(1) (4) どういいう内容ですか？（なるべく詳しく）※中文OK

(1) (5) ○○の建設以前、何が建っていたか知っていますか？

(1) (6) （台南出身の方）台南に住んで何年になりますか？

(2) その他の場所の「鬼」について

- (2) (1) ○○以外で「鬼」の出現する場所を知っていますか？
はい・いいえ（台南以外でもOK）

※以下「はい」と答えた方のみ記入してください
（2）（2）場所はどこですか？

(2) (3) いつ頃、知りましたか？

(2) (4) 誰から聞きましたか？

(2) (5) どういいう内容ですか？（なるべく詳しく）※中文OK

(3) 台湾の「鬼」について

(3) (1) 「鬼」とは何ですか？

(3) (2) 「鬼」の存在を信じてますか？ はい・いいえ

(3) (3) 「鬼」の絵を描いてみてください

(4) 台湾の「幽霊」について

(4) (1) 「幽霊」とは何ですか？

(4) (2) 「幽霊」の存在を信じてますか？ はい・いいえ

(4) (3) 「幽霊」の出る場所はありますか？

(4) (4) 「幽霊」は、いつ頃、出ますか？

(4) (5) 「幽霊」の話を知つてますか？ はい・いいえ

- (4) (6) どういいう内容ですか？（なるべく詳しく）※中文OK
(4) (7) 「鬼」と「幽霊」の違いは何ですか？※中文OK
(4) (8) 「幽霊」の絵を描いてみてください

差し支えがあるので伏せ字にしたが、デパート名の「○○」の箇所には、実際は企業名と店舗名が入っている。日本を代表する老舗デパートとだけ書いておく。

対象は日本語学科の学生であるが、(1)-(4)、(2)-(5)、(4)-(6)、(4)-(7)については、闊達な表現をしてもらえるように、中国語での回答も可とした。結果は、半数ほどが中国語で回答をした。

このアンケートは複数回答・無回答を許しているうえ、女子学生に対象が偏っているので、いわゆる統計調査の精確さはないが、ある程度の傾向は掴めたことと思う。以下、設問(1)を中心、アンケートの結果を分析する。

まず、(1)-(1)「知つていますか？」については、「〇一人が「はい」と答え、三四人が「いいえ」と答えた。地域差はとくにないが、台南出身の学生三八人全員が「はい」と答えている点は、当初の予想通りとはいえない、留意しておく。

次の(1)-(2)「いつ頃、知りましたか？」については、大多数の生徒がデパートの建築が進む二〇〇一年以降と答えているが、二〇〇〇年より前に知つていたと答えた学生が、台南出身者で一人、台南以外の出身者でも三人いたことは注目に値する。なかでも、台南出身者の一人のうち五人は、一九九五年以前

から、この土地の鬼の噂を耳にしていると答えていた。これを信じるなら、空き地の状態のときから、この土地には鬼の噂があつたことになり、そこへデパートが建てられたことになる。

(1) (3) 「誰から聞きましたか?」については、友人知己からという返答がほとんどで目立った特色はないが、「大学のホーミページ」「インターネット」が一例ずつあるのは、その数の少なさにおいて興味深い。⁽⁶⁾ ネットで伝承されることの多い現代

台湾の鬼の噂のなかにあって、これは異例といえる。今後の展開はさておき、現時点でのこの話はまさに口承説話であった。

(1) (4) については、次節で触れる。

興味深いのは、(1) (5) 「○○の建設以前、何が建っていたか知っていますか?」の回答で、「監獄」と答えた学生が台南出身者で二八人、台南以外の出身者で二二人。「刑場」と答えた学生が台南出身者で一五人、台南以外の出身者で四七人いたことである。台南の出身であるなしに関わらず、かなりの学生が精确に土地の歴史を把握しているのである(人数の不一致は、「監獄」と「刑場」を並記した学生が複数いたことによる)。ことに、鬼の噂を知らない学生でも、三人が「監獄」、五人が「刑場」と答えていたのは、台南刑務所の知名度を知るうえで参考になる。また、噂を知らない学生で一人、「墓地」という回答があり、これも土地のイメージを知るうえで面白い。⁽⁷⁾ 一方、「何もない」と刑務所移転後の更地の状態のことを書いていた学生が、台南出身者で一人、台南出身者以外でも一人いた。

(1) (6) 「(台南出身以外の方) 台南に住んで何年になりますか?」については、台南に住んだあと知ったたという平凡な事実が挿めただけであるが、噂がローカルなものであるという証左にはなった。事実、アンケートとはべつに、ことあるごとに、台湾人にこのデパートの鬼の話について尋ねているが、台南出身者以外で知っている人は皆無に近いのである。

三、某日系デパートの鬼

先に紹介したアンケート項目のうち、設問(4)は当初の予定になかったが、調査前の雑談で「鬼」と「幽霊」を別物と捉えている学生が多いことがわかつたので、設けてみたものである。辞書的には中国語の「鬼」を日本語訳すれば「幽霊」になるはずであるが、現代台湾の大学生の感覚ではそうともいえない。

(4) (7) 「鬼」と「幽霊」の違いは何ですか?」に対する回答で、「同じ」と答えた学生が四一人。ほかに「わからない」と答えた学生が一四人おり、これを「鬼と幽霊の違いがわからない」の意に解すれば、鬼と幽霊を同一視している学生は五五人。つまり半數以上の学生が、鬼と幽霊を区別しているらしいことがわかる。

台湾の学生のイメージする鬼と幽霊の相違についての考察も興味深いテーマであるが、詳述する余裕はない。ここでは複数回答のあつたもののうちのいくつかを記すにとどめる。

代表的な回答例は「鬼は人に害をなす」というもので、二〇名の学生がそう答えていた。逆にいえば、「幽霊は無害」とい

うことになる。説明の際に、この世に怨恨を残して死んだ人の靈魂が鬼になるという旨のことを書いた学生もいた。

また、「鬼は姿があるが、幽霊は姿がない（あるいは、半透明である」と答えた学生も一四人いた。これは調査結果の数字以上に浸透した理解のようで、(3)-(3)と(4)-(8)で鬼と幽霊の絵を学生に描いてもらつたところ、鬼を実体のあるものとして、幽靈を実体のないものとして描きわける学生も少なからずいた。⁽⁸⁾

台湾の学生たちが鬼に対して抱いている恐怖心は、日本人の比ではない。印象批評になつてしまふが、話の内容を怖がつて

いるというよりも、話に登場する鬼そのものを怖がつてゐる風情がある。アンケート項目(3)-(2)「鬼」の存在を信じてますか?」に対する回答では、「二三人が「はい」三人が半信半疑と答え、「いいえ」と答えた九人ははるかに上回つた。はたして、日本の大学生に「幽霊の存在を信じてますか?」と質問してみて、これだけの数字が出来るものか否か。たんに話を追つているだけでは、わからない点なので、指摘しておく。

このように、古典資料にみられる中華圏の鬼観念の理解とはべつに、変容する現代の中華圏の鬼のイメージも理解しておかなければ、本稿の目的とするような研究はおぼつかない。それにしても、デパートという現代的かつ開放的な空間の、どこに、どのような鬼が出没するのだろうか。

項目としては設定しなかつたが、アンケートの回答には、鬼の出る場所について触れたものもあった。このうち複数回答が

あつたのは、映画館（18例）、エレベーター（7例）、駐車場（3例）、トイレ（3例）の四ヶ所である。

突出して事例が多い映画館は、建物の最上階にあたる六階と七階にあり、上映館がいくつも併設された、いわゆるシネコン（シネマ・コンプレックス）となつてゐる。駐車場といふのは、地下駐車場のことと、エレベーターやトイレなどとともに、死角になる場所——既存の語を使うならば「境界」となるか——が、鬼の出現場所となつてゐるのがわかる。

それでは具体的な話の内容はとすると、これがきわめて貧弱である。アンケート項目の(1)-(4)「どういう内容ですか?」に対する回答にも、学生の多くはデパートに鬼が出るという情報以上のことは書いていない。実際に、学生やその他の台南人に話を聞いてみても結果は同じで、買い物をしているとき、何となく気味が悪い感じがする、という程度の反応が概ねであった。あるいは、展開部分をもたないまま流通するというのが、この世間話の有り様なのかもしれない。この種の禍々しい話柄の場合、しばしば起こりうる事態である。⁽⁹⁾

次に紹介するのは、数少ない話例のいくつかである。

〈例2〉 映画館で。最終上映が終わつて、後ろを向いたところ、たくさんのおばさんたちの鬼が座つていた。

〈例3〉 エレベーターで。母と娘（子ども）が乗つていてると、

〈例2〉 同じく映画館で。席につくと、「おれの脚の上にすわるな」という声がした。

ほかに客がないのに、娘が「混んでるね」と言つた。

〈例4〉 デパートを建設中。変な音や叫び声が聞こえた。また、事故死など、変死者が相次いだ。

〈例5〉 隣接するホテルで。誰もいないのに、廊下を歩く音や、ドアをノックする音が聞こえた。

〈例6〉 隣接する学校で。屋上から人が飛び降りるのを見るが、下へ行つてみると、その形跡はない。

右のうちで、比較的ポピュラーなのは〈例1〉と〈例3〉である。

〈例2〉は〈例1〉のバリエーションと位置づけられようか。〈例4〉の話し手は、建築中の様子を知っている台南の学生に限定される。〈例5〉〈例6〉は、デパートの怪談ではないが、その土地のもう1イメージを知るうえ手がかりになるので載せた。デパートに隣接する場所にまつわる怪異としては、このほかに、公園やカラオケなどがある。ただし、いずれも話としての展開部分はない。参考までに、界隈の立地を示すと、次のようになる〔図5〕。

また、これも項目として設定したわけではないが、鬼の容姿について触れた学生もいる。興味を惹かれる点もあるので、少し紹介する。

まず、「頭がない」というのが4例、「手枷足枷」をしているというのが4例、さらに「頭がない+足枷」というのも1例ある。「手枷足枷」は今までもないが、「頭がない」というのも、ここがかつて刑場であつたことによる連想であろう。澤田瑞穂



〔図5〕

は「鬼趣談義」に「頭のない幽霊」なる項目を立てているが、そこで紹介されている『庸盦筆記』（清代・薛福成）には、やはり刑場跡に出る頭のない亡者の話がある。その意味では、伝統的な中華圏の鬼の姿のひとつであった。

参考までに述べると、当時の日本の処刑法は絞首刑であつて、斬首刑ではない。また、後ほど触れるように、国民党時代の処刑法は銃殺刑であつた。いざれにせよ、頭のない鬼の出現理由になるような、斬首は行なわれていなかつたのである。実際とは異なる習俗が話に盛り込まれるのはそう珍しいことではないが、国民党時代や日本統治時代以前の、清朝の時代の処刑方法に関する記憶が話に影響を及ぼしているのだとすれば、注目に値する。

清朝統治時代の台湾の処刑法は「其罪大にして悪極まる者の如きは、梶首して衆に示す」というもの⁽¹⁾、まさに頭のない鬼の根拠になるものである。さらにいえば、「手枷足枷」も清朝時代の記憶の残存の可能性がある。清朝時代の罪人は「厚木板」を円形に穿つた「號載」という足枷をしていた。

一方で、鬼が「日本の軍服」を着ているという回答も、2例あつ

た。これは台南監獄の実情と合わないが、台灣で驅かれる世間話の鬼は、しばしば旧日本軍の軍服姿をとる。この点は、台灣の地域性を考えるうえで、見落とすわけにはいかない。

四、支配者の影

アンケートに答えた学生たちが物心ついたころ、台南刑務所はすでに取り壊されていた。彼ら彼女らは、刑務所を直接には見ていない。見ていたのは、台南の市街地にぽつかりと空いた刑務所の跡地だけである。先に述べたように、人口の密集した台南市内にあって、そこだけが異様な空間であつたところとは、想像に難くない。そのことが、かえつて刑務所を実際に見ていない世代のイメージーションを刺激したものと思われる。

同じ台南人でも、学生たちの祖父母の世代ならば、件のデパートの鬼の噂に、もつと生々しい恐怖感を抱くであろう。この世代は、戦前の日本統治時代と、その後の国民党による圧政を経験した世代である。

次に紹介するのは、台南市にお住まいの郭清來さん（一九三一年生、男性）からうかがつた話である。^[12] 郭さんは、先祖代々 台南に居んでいるという生粋の台南人である。例のデパートがあつた一帯も、かつては郭さんの家の土地であったが、日本政府に買収されたという。自宅も勤務先の電信局も、刑務所の近隣にあつた。台南刑務所の変遷をつぶさに見てきた方である。

監獄建てたあと、たくさん殺されたの。その怨恨がね、残つて。○○を建てるときには、和尚さん、たくさん来てね、アレしたんだよ。お祓いしたの。でも、逃げなかつた。やつと道士が来て、怨恨をつぶして、家、建てたの。

（中略）

ちょうど、おれが電信局に出勤してるととき、課長で。脇の、後ろでやりよつたから、毎日、見とつた。三、四日間もね。法規かけてね、怨恨をやるわけよ。

それで、あとでうまくくだしてね、怨恨をくだして、建てたんだけど、建てたあとでも「○○は出るよ」って（笑）。

「グイカッチエー」……「グイ」とは「高い」意味でしょ。「○○はダイカツチエー」って（笑）。

（中略）

「○○の品物は高い」、反対のことは「鬼が多い」という、両方の（笑）。ずいぶんと銃殺されとつたから。

—— たくさん、人が死んだんですか？ —

うん、むかし、いろいろ捕まえて、藁帽かぶらつて、数珠つなぎに行くの、毎日、見てる、ほくら。うちの近所だから。—— 監獄は、国民党も監獄として使つてたんですか？ —

うん、そりそりそりそり。犯罪者とか政治犯もやはり、大きい

政治犯は綠島に……火燒島にもつてつて、小さい政治犯は、

はじめはやはりここでちよつと詮問うけて、それから火燒島

まで行くんだ。だから、白色テロで死んだ人も、このなかに

あるかもしれません。

— やはり国民党時代も処刑はされていたんですか？ —

そうよ、国民党時代も。

— 台南の監獄で？ —

うん、以前、むかしは銃殺もあった。うん、あるあるある。

あとでなくなつたけど、銃殺の音、聞いたことある。

郭さんの説明にあるように、「ガイカツチエー」というのは台

湾語（閩南語）で、「ガイ」は「鬼」と「貴（＝高い）の意」、「カツチエー」は「多い（台湾語なので漢字はないが、無理にあてると「加勢」ではないかという）」で、「〇〇には鬼が多い」と「〇〇には高い商品が多い」の掛詞になつていて。^[14]

このあと、郭さんの幼なじみである謝榮宗さん（一九三一年生、男性）が会話に加わった。謝さんも代々の台南人である。国民党時代と比較して、日本統治時代に肯定的な評価がくだされているのは、日本人には複雑な感情を抱かせるが、この世代の台湾人の平均的な見解である。

— （刑務所は）処刑場もかねてたんですか？ —

謝 「……もあつた」

郭 「むかしはあつた。で、白色テロのときもあつたよ」

謝 「じつをいふとですね、むかしの日本人はですね、何から何まですぐね、死刑と宣言しない」

郭 「裁判をしてから……」

謝 「国民党時代はね、白色のテロでね、銃殺とかね、行方不明になる人が多い。日本は、いくらですね、日本政府に反対しても、せいぜい二十九日」

（中略）

謝 「これは政治犯にたいしてですよ。もしくは、思想犯にたいしてね。いくら長くても二十九日しか牢屋に入れないと」

— それは日本時代ですか？ —

謝 「ええ、日本時代」

郭 「その間に、裁判にかけたりなんかするんだね。国民党はその裁判もかけずに……」

謝 「銃殺してしまう」

郭 「少なくともね、

その間に裁判にかけなきや」

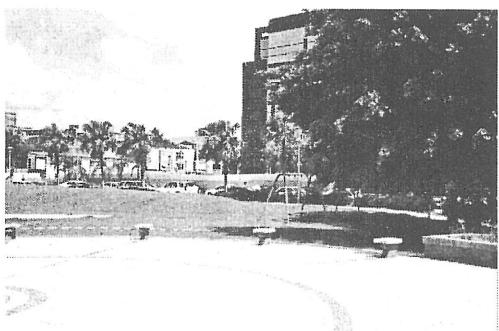
（中略）

謝 「あのあたりに行くとね、ちょっと鳥肌が立つとかね」

郭 「鬼が出るとか」

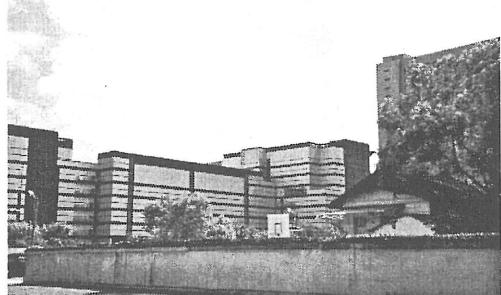
見たことないけど、

そういうふうにね、



国泰広場。中央の小高くなっている所が刑場跡。右に見えるのがデパート。

いうのね」



中央がデパート。右がホテル。手前に見えるのは、日本統治時代の監獄官の宿舎。

最後に交わされた会話には、時代を経験した者にしかわからない実感がこめられている。この日、お二人は二・二八事件

の生々しい体験も話しているが、とくに郭さんは、同事件で犠牲になつた弁護士、

湯徳章が公開処刑さ

れる瞬間を見ている。

【図5】に示したように、台南監獄のあつた場所の一部は、公園になっている。じつは、刑務所ならびに留置所があつたのは現在のデパートとホテルのある場所で、公園になつてゐるのは、かつて処刑場のあつた場所である。刑務所や留置所ならともかくも、さすがに処刑場のあとには何も建てられなかつた。

この公園の名称は「國泰廣場」という。解説板「國泰廣場地名由來」によると、「日治時期於明治三十三年（1900）於此地建臺南刑務所總面積臺南監獄一萬八千一百坪」のうち、一三三三三坪が公園になつたとある。解説板の日付には「2001.8.9」

とあるので、デパートやホテルと同じ時期に造られたことがわかる。しかし「地名由來」といながら、何故に「國泰廣場」というのかは、一切書かれていない。妙な話だが、書くまでもなく、消えた人には無辜の民も多かつた。

また、デパートの界隈には、当時の建築物が多く残つていて、台南地方法院（国民党時代も裁判所として使用。現、司法博物館）、日本時代の監獄官の宿舎に加え、国民党時代の監獄官の宿舎もある。デパートとホテル、公園は真新しいが、それを取り囲む近辺の様子は、日本統治時代とほとんど変わらないのである。そうした風景が、話に凄味を与えていたといえよう。

おわりに

台南のデパートの鬼の話は、常に外来政権の施政の中心が置かれていた台南という土地柄に加えて、舞台となつた刑務所が日本政府、国民党政府と二代にわたつて使用されていた点、国民党による恐怖政治がごく最近まで続いていた点、さらには、その跡地に建てられたデパートが、かつての支配階層である日本資本であつた点などに、個性がある。

この話の怖さは台湾人にしかわからないし、また、台湾人であつても、台南に生まれ育つた者でなければ、皮膚感覚での怖さはわからないだろう。あの日、刑場跡の公園を案内していくださつた許明石さん（一九三四年生、嘉義市出身）は公園の中に

入ったが、運転手の連江海さん（一九四五五年生、台南市出身）は、けつして入ろうとしなかった。私はこの公園の前は何度も通っているが、いつも閑散としていて人影はまばらである。

また、このデパートの怪談は、忌まわしい「前代」と、前代よりはいくらか良い「現代」との因果を説くタイプの世間話である。⁽¹⁵⁾ここで問題になるのは、「前代」とはいつか、ということである。

現代の日本の世間話の場合、「前代」とは概ね六十年前の戦前・戦中期という時代である。対して、台湾の世間話の「前代」は、日本統治時代のほかに、民主化以前の国民党時代があげられる。前者は日本の世間話の「前代」と共通しているが、後者は台湾の世間話のみの特徴である。仮に、話し手・聞き手を大学生と想定するなら、日本の大學生と台湾の大學生とでは、「前代」との距離感がまるで異なるのである。

もしも今後、世間話の国際比較といった分野が進捗するのであれば、話型の比較的重要性はさることながら、話型からは見えてこない部分を含めた比較研究も待たれるであろう。国ごと民族ごとの特色を明らかにしようとするのならば、神話や昔話伝説よりも、むしろ世間話のほうが顕著な結果が現れるのではないかと思われる。その際に重要なのは、世間話における〈世間〉の比較と、〈話〉の比較という視座であろう。

それを踏まえたうえで、何故に他国と比較するのか、という

問い合わせが生ずるわけであるが、これについては各人の問題意識の

持ちようによるとしか答えようがない。私自身のことをいえば、台湾との比較を通して、日本の近代を浮き彫りにできるのではないか、というのがその問い合わせに対する答えである。台湾の近代史はそのまま日本の近代史と重なる。共有されたふたつの近代

— 近代日本の「内地」と「外地」 — を世間話から考察してみるのも、口承文芸研究の可能性のひとつであろう。

注

(1) 台湾で有名な「鬼屋」は、嘉義県の民雄の鬼屋や、基隆市の鬼屋などである。

(2) 本稿では、「世間」という語を柳田國男の定義した「他郷」の意ではなく、それこそ世間一般で用いられる「世間」の意味に近づけて使っている。

既存の論考でいうと、阿部謹也による次のようない定義が近い（阿部謹也『西洋中世の愛と人格—世間論序説』一九九二 朝日新聞社）。曰く「世間とは、身内以外で、自分が仕事や趣味や出身地や出身校などを通して関わっている、互いに顔見知りの人間関係のことである。」

ただし「互いに顔見知り」である必要はないし、特別な「人間関係」も必要としていない。私の考える「世間」はある条件下で、無意識のうちに形成される仲間意識くらいに考えている。

なお、柳田國男の「世間」論については、『日本説話小事典』

(二〇〇二年、大修館)の高木史人の解説に詳しい。

(3) 『台南市志』卷三(政事志上) 一九七九 台南市政府

(4) 図版の引用元は左記の通り。

【図1】「大日本職業別明細図」第44号(台南) 一九三六

*『中国商工地図集成』地図資料編纂会(一九九二 柏書房)より。

【図2】「台南市街圖」一九八三 台南書局

【図3】「台灣遊透透」二〇〇〇 戶外生活圖書

【図4】金子常光「觀光は臺南市から」一九三四

*莊永明『台灣鳥瞰——一九三〇年代台灣地誌繪論——』

(一九九六 遠流出版)より。

(5) もちろん、説話の記述者が「鬼」という語を用いたといふだけで、民間語彙として定着していたわけではない。

(6) 「大学のホームページ」とは、南台科技大学のホームページにある掲示板のことで、さまざまな怪談が伝承される場となつてゐる。

(7) 日本統治時代、実際に台南刑務所の脇に墓地があつた。台南出身でないこの学生が、その事實を知つていたのかは不明であるが、土地のもつ不吉なイメージの生成に関係があるかもしれない。記しておく。

(8) 拙稿「鬼の絵を描いてみてください」——現代台湾の大學生の「鬼」イメージ『不思議な世界を?考える会会報』

第55号、二〇〇六

(9) 大門哲「校長先生、人、殺してん——少女は何を語り損ねたのか」『加能民俗研究』第27号 一九九四

(10) 澤田瑞穂『鬼趣談義』一九七六 国書刊行会

(11) 『南部臺灣誌』臺南州共榮會 一九三四

(12) お話を二〇〇五年三月六日に、郭さん宅で日本語でうかがつた。

(13) 「綠島」は台湾本島南西部に位置する孤島。「火燒島」は日本統治時代の名称。流刑地に使われた。

(14) 閩南語は北京語よりも発音が複雑で、声調が八つある。台北出身の林佳慧氏によると、「鬼」と「貴」は少し発音が異なるとのことである。

(15) 前代と現代の因果をめぐる世間話については、常光徹『学校の怪談』(一九九四 ミネルヴァ書房)、松谷みよ子『現代民話考』7(一九八七 立風書房)などで言及されている。また、刑務所と現代建築をめぐる噂としては、戦犯を収容していた巣鴨プリズンの怪談が参考になる。この点については、広坂朋信『東京怪談ディテクション』(一九九八星霜社)を参照。

*本稿を草するに際して、許明石氏には多大な協力を得た。
ここに記して謝意を表したい。
(いとう・りょうへい/台湾・南台科技大学)